共愛学園前橋国際大学

グローバル
人材育成推進事業
中間報告書

平成 27 年 9 月

平成 24-26 年度

内容

1.大学のグローバル化に向けた戦略と教育課程の国際通用性の向上 1

1-1. 大学のグローバル化の推進 1
1-1-1. 大学の戦略的な目標等への位置づけ 1
1-1-2. 大学のグローバル化の推進体制 1

1-2. 教育課程の国際通用性向上のための取組 2
1-2-1. 副専攻の開設 2
1-2-2. シラバスの充実・多言語化 2
1-2-3. ナンバリング制度導入の検討 2
1-2-4. GPA、キャップ制、厳格な成績評価等の検討 2
1-2-5. 学修時間確保による単位制度の実質化 2
1-2-6. アクティブ・ラーニング環境の充実 3

1-3. 戦略的な国内外への教育情報の発信 4
1-3-1. GGJ 事業専用 HP、Facebook の立ち上げ 4
1-3-2. GGJ 事業専用パンフレット、英語版パンフレットの作成 4
1-3-3. グローバル人材育成シンポジウムの開催 4

1-4. 事務体制のグローバル化 6
1-4-1. 「留学支援センター」の強化 6
1-4-2. 事務局のグローバル化 6
1-4-3. 規程書類の多言語化 6
1-4-4. 海外からの受け入れ環境の充実 6

2.グローバル人材として求められる能力を育成するための大学の特色に応じた取組 7

2-1. 地域連携による人材育成 “GUNMA GLOBAL PROJECT WORK” 7
2-1-1. グローバル人材育成推進協議会の形成 7
2-1-2. グローバル人材育成プログラムの開発と実施 7

2-2. GLOBAL CAREER TRAINING 副専攻 12
2-2-1. 科目群の構成 12
2-2-3. グローバル人材へ成長する学生支援 13
2-2-4. 地方小規模大学であること 13

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

3.教員のグローバル教育力の向上の取組 14

3-1. 教育体制のグローバル化 14
3-1-1. 外国人教員等の採用等によるグローバル化 14
3-1-2. グローバル化を促進する授業方法 14
3-1-3. 教員の研修 14

3-2. グローバル教育力向上のための取組 16
3-2-1. FD による改善、評価の取組 16
3-2-2. グローバル教育力の向上 16

4.日本人学生の留学を促進するための環境整備 17

4-1. 日本人学生に対する動機付けや、留学を促進するための取組 17
4-1-1. グローバルセンター、および体制の充実 17
4-1-2. 奨学金制度の充実 17
4-1-3. 入学前プログラム 17
4-1-4. 海外留学プログラムの充実 17

4-2. 留学中から帰国後にわたるサポート体制 19
4-2-1. 留学生のサポート体制の充実 19
4-2-2. 緊急時対応の強化 19
4-2-3. 産業界との連携 19

5.語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組 20

5-1. 入試における中等教育段階までの外国語力・留学経験等の適切な評価 20
5-1-1. 外部試験の入試への活用 20
5-1-2. 留学経験の重視 20

5-2. 卒業時の外国語スタンダードを見据えた効果的な語学教育及び教育体制 21
5-2-1. 入学時プレイスメントテスト等 21
5-2-2. 外国語論文作成能力等の育成と留学前準備 21

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

【参考資料①　中間評価結果】 22

【参考資料②　H26/8/3-4　児童向けグローバル教育ワークショップ】 23

【参考資料③　H26/8/6-15　海外研修サポートインターン】 24

【参考資料④　H26/2/15-28　ミッションコンプリート研修】 25

【参考資料⑤　H26/9/3-11(ﾀｲ), H27/2/9-15(台湾) アジア異文化研修】 26

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

1. 大学のグローバル化に向けた戦略と教育課程の国際通用性の向上

1-1. 大学のグローバル化の推進

1-1-1. 大学の戦略的な目標等への位置づけ

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（旧グローバル人材育成推進事業、以下「GGJ 事業」という）の構想調書計画通りに、本学の平成 26 年度～30 年度中期計画（平成 26 年 1 月策定）において、大学の教育研究計画として、「グローバル化する地域の振興を担う人材の育成」、「グローバル人材育成推進事業の滞りない実施と、これを契機とする教育力の向上」、「海外にひらいた人材育成のしくみの強化」を盛り込み、大学全体の戦略的な目標に位置づけ、教職員全体で改めて共有した。

1-1-2. 大学のグローバル化の推進体制

GGJ 事業を推進するため、計画通り、本学では平成 24 年度 10 月に理事長（兼事務局長）、学長、学部長、学長補佐、事務局次長（現在は理事長、学長、副学長、学部長、学長補佐、事務局長）を中心に構成する「グローバル人材育成推進本部」を発足させた。同推進本部内に構成員 7 人の同推進本部事務局（以下「GL 事務局」）を設置し、アウトバウンド・インバウンド担当として 2 人、副専攻・語学力推進・情報発信・交流担当として 2 人（平成 26 年度より 1 人）、環境整備担当として 1 人を配置、そして統括、統括代理の体制で業務推進をしている。

また、同推進本部は平成 25 年 2 月に設立した「グローバル人材育成推進協議会」事務局として、Global Project Work の企画立案も担当している。

同推進本部、同推進本部事務局が立ち上がったことにより、グローバル化に向けた各施策を迅速に進めることができた。および、GL 事務局の職員は外国語力に長けており、急な海外とのやり取りなどに素早く対応することができている。

さらに、平成 26 年度には既存の「国際交流センター」と「留学生支援センター」を統合し、留学生の送り出しと受け入れを一体的に担当し、グローバル人材育成推進本部と協働し、本補助事業並びに独自の国際化事業を展開するための全学組織として「グローバルセンター」を立ち上げ、より一層の学内の体制強化を図った。

【今後の展望】

上述の GL 事務局の一部は GGJ 事業採択による補助金を使用する常駐型の委託派遣職員によって構成されているが、本補助期間終了後も引き続き同品質で運営できるよう、本事業運営で得た各種ノウハウを他部署と共有していくこととする。これにより、本補助期間終了後も GL 事務局業務は各部署が強固に連携して効率よく実施し、事業を継続していく素地を整えられると考える。

事業運営効率化、学内部署との連携により、平成 26 年度の常駐型の委託派遣職員は、前年度から 1 人減の 5 人となった。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

1-2. 教育課程の国際通用性向上のための取組

1-2-1. 副専攻の開設

平成 25 年 4 月に修了要件を 30 単位とする「Global Career Training 副専攻」を開設した。(副専攻カリキュラム、実績については後述 P12。なお、初年度となる平成 25 年度は 3 人がこの Global Career Training 副専攻を修了した。

1-2-2. シラバスの充実・多言語化

平成 24 年度から平成 25 年度前半にかけて、そもそも英語によりシラバスが作成される英語のみ科目等以外のすべての授業において、シラバス概要の英語化を実施した。

また、シラバスを充実させるため、平成 25 年度に「授業外学修時間の目安や内容」、「アクティブ・ラーニングの実施」に関する内容を記載する指示書を確定させ、平成 27 年度シラバスにおいて全科目この指示書通りとなった。さらに、平成 27 年度シラバスより授業外学修に関する項目を追加しフォーマットを整えた。

なお、多言語化の1つとして検討していた中国語化については、外国語による授業を英語に特化し推進していくため、見送ることとした。

1-2-3. ナンバリング制度導入の検討

平成 24 年度に国内外先進大学(ミズーリ州立大学、新潟大学、国際基督教大学、早稲田大学国際教養学部、宮崎国際大学)の視察を実施した。この知見をもとに平成 25 年度に入り、教務グループが検討を重ね、当初予定より 1 年早い平成 27 年度より導入することとした。

1-2-4. GPA、キャップ制、厳格な成績評価等の検討

GPA 及びキャップ制(原則年間上限 40 単位)は GGJ 事業採択前から既に導入していたが。厳格な成績評価に未導入であった。そこで、平成 24 年度に実施した国内外先進大学への視察を参考に、こちらもナンバリング制度同様に当初予定より 1 年早い平成 27 年度より実施することとした。

GPA についても、これまで学生のインセンティブとして活用してきたが、成績が振るわない学生への指導等に活用する制度を準備する。

1-2-5. 学修時間確保による単位制度の実質化

現段階において、学生の学修時間については抽出調査の実施のみにとどまっているが、平成 26 年度中には全学調査を実施し、かつ平成 28 年度末までに週 10 時間の授業外学修時間確保を目標とした。そのために、上述の通り、各教員にシラバス上に「授業外学修時間において、どの程度の学修を必要とするか」を明記するよう平成 27 年度より徹底した。

また、アクティブ・ラーニングを推進することにより、学生の実質的な学びの時間を増やすよう努めている。その一環として、教員間の情報把握密度を高めるため、各コースの授業を可視化した「Good Practice」を冊子化し各教職員に配布した(平成 26 年 12 月)。同時に非常勤講師全員にも配布することにより、全体への浸透も強めた。

なお、本学は平成 26 年度「大学教育再生プログラム(AP)」事業に採択され、学修の質保証のため

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

の基盤整備を行うとともに、質保証システムを構築することを目的に推進している。

1-2-6. アクティブ・ラーニング環境の充実

本学では、無線 LAN をキャンパス全域に配し、配布された携帯端末を活用するユビキタスキャンパスを構築。また、Learning Commons を中心とするアクティブ・ラーニングのための新校舎 KYOAI COMMONS を平成 23 年度に建設した。GGJ 事業採択後には加えて、既存教室のアクティブ・ラーニング環境充実のための機器・設備を導入した。

現状、総授業の約 75%が何らかのアクティブ・ラーニング要素（PBL・SL・グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り等＋語学・情報スキル・体育・演習）を展開する授業となっており、かつ、専任教員の全てがアクティブ・ラーニング要素を盛り込んだ授業を展開している。

また、より効果的な学修を目指し、平成 24 年度に導入したクリッカー等を使用し、アクティブ・ラーニングの効果測定を行った。具体的には、学生の集中度と理解度をクロスさせるフロー理論を活用してアクティブ・ラーニングの効果を測定した。

人は自己の没入感覚を伴う楽しい経験を指すフロー状態にあるとき、学修者は高い集中力を示し、その経験と学修意欲や創造性などとの密接な関係が報告されている。当初、アクティブ・ラーニングが講義よりもフロー度が高くなると想定したが、総体としてはその傾向を示したものの、学生によっては、アクティブ・ラーニングの度合いが高まることで集中度を欠き、理解度も落ちる者もあった。このことから、アクティブ・ラーニングの実施に際しては、学生観を定めて実施する必要が見えた。このような効果測定のノウハウを蓄積しつつ、他の授業に敷衍させる契機を生み出したことは大きな成果であった。

当初計画には含まれていないが、全学的教学マネジメントに一層の実効性を持たせるために、平成 26 年度には学長を責任者とする IR 組織体を形成し、教学 IR を中心とした IR 実施体制を整えた。

【今後の展望】

現在全学アンケートによって把握している学生の学修成果について、個々の学生が学修ポートフォリオを基盤として学修成果を確認できるしくみを導入、エビデンスをもとにしたカリキュラム改善と質保証を可能とする環境を平成 27 年度中に整える予定である。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

1-3. 戦略的な国内外への教育情報の発信

1-3-1. GGJ 事業専用 HP、Facebook の立ち上げ

平成 24 年度に英語版公式 WEB を開設し、継続的な運用を実施している。平成 25 年度には、更に対外広報に努めるべくGGJ 事業専用 HP、専用 Facebook ページを開設した。専用 HP には事業活動、活動報告、学生・教職員のインタビューを掲載し、Facebook には日々の活動、学生への情報提供を中心に掲載している。

開設以降、在学生に GGJ 事業をより意識してもらうため、Facebook におけるフォロワー数を増やすための情報共有を継続し、現在 206 人（平成 27 年 3 月 16 日現在）までフォロワー数を伸ばした。

・ホームページ ： http://ghrd.kyoai.ac.jp
・Facebook ： https://www.facebook.com/KYOAI.GLOCAL.PROJECT?fref=ts

（左)GGJ 専用ホームページ（平成25年2月開設）、（右）Facebook 専用ページ（平成25年5月開設）

1-3-2. GGJ 事業専用パンフレット、英語版パンフレットの作成

GGJ 事業専用パンフレットを平成24年度に作成し、県内高校 90 校、県内企業約 500 社、県庁・商工会議所など計、1,000 箇所以上に配布することにより、本学の取組の認知度向上を図った。平成 25 年度、平成 26 年度も県内高校、県内企業への対外広報を継続。

また、平成 25 年度に本学への入学を希望する留学生向け、及び海外での広報活動用に英語版パンフレットを作成し、海外においては提携先大学等への視察時などに配布し広報活動を行った。

なお、本学の GGJ 事業の実績報告は専用 HP にて公開している（平成 24 年度、25 年度）。

1-3-3. グローバル人材育成シンポジウムの開催

本学の GGJ 事業の取組についての対外広報、学生の海外体験発表の場として、平成 24 年度末、平成 25 年度末、平成 26 年度末にシンポジウムを開催した。3 回目の開催となった平成 26 年度実施シンポジウムには 100 人を超える参加者があり、地域へ本学の取り組みを発信することができた。

また、入学予定者の参加も徐々の増えており、入学前に本学の取組をより深くする機会の提供も進んできているといえる。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

▸平成 26 年度開催シンポジウム
・テーマ:　グローカル人材について考える
・日時:　3 月 6 日（金） 14:00 – 16:30
・場所:　本学　大講義室
・来場者:　110 人

H26 年度シンポジウム「グローカル人材について考える」

【シンポジウムの来場者数、登壇学生数】

	H24 年度	H25 年度	H26 年度
来場者数	90（0）	80（9）	110（14）
登壇学生数	3(注 1)	7(注 2)	6

※来場者数の( )内数字は次年度入学予定者数
※(注 1) うち 1 名は学外から遠隔映像システムで参加
※(注 2) うち 1 名はタイより Skype で参加

【今後の展望】
現在、当然ながら学校教育法施行規則に定められた公表すべき事項や自己点検評価結果、大学基準協会による認証評価等について公表してきたところであるが、今後はより国際的な視点に立ち、それらに加えて「国際的な大学評価活動の展開状況や我が国の大学に関する情報の海外発信の観点から公表が望まれる項目」を加味し、より一層の情報公開に務め、平成 28 年度中に国際通用性のある情報公開を実施するものとする。加えて、地域密着大学として、本学の群馬県地域への人材輩出データ等の地域関連情報も公開していくことを検討する。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

1-4. 事務体制のグローバル化

1-4-1. 「留学支援センター」の強化

平成 26 年度に既存の「留学生支援センター」を「国際交流センター」と統合し、「グローバルセンター」として改組。このセンターは、よりグローバルを意識した組織に位置づけ、この中に属する「留学生支援グループ」は、留学生支援全般を担当している。そこには外国人教員のみならず、高い外国語能力を有する前述の GL 事務局専門員も兼務している。

また、アクティブ・ラーニング専用学修棟である「KYOAI COMMONS」には、英語、フランス語の堪能な非常勤学修支援員を配置することにより、教育環境のグローバル化を図った。同時に、留学生相談員を配置、並びに日本人学生による留学生チューター制度も展開している。

1-4-2. 事務局のグローバル化

事務局全体のグローバル化に向け、外国語力スタンダードを有している職員を平成 25 年度に 2 人採用した。同時に職員には前述の自学自習できる One on One English（Skype を利用した 1 対 1 の英語レッスン＋e-ラーニング）の受講を可能とし、既存職員の外国語力を高める環境を整えた。その結果として、平成 28 年度には職員の 2 割が一定の外国語力を有することを目指していく。

なお、GL 事務局に常駐する委託派遣職員である専門員、事務職員は全員が TOEIC800 点以上もしくは海外勤務経験を有している。

1-4-3. 規程書類の多言語化

平成 24 年度に履修ガイド（教学に係る規定や手続きをまとめたもの）の完全英語化を実施し、留学生が常に閲覧できる環境を整えた。

1-4-4. 海外からの受け入れ環境の充実

海外からの招聘者の宿泊施設として、大学近隣に 4 部屋 6 人収容可能のゲストハウスの準備をした。現在、中国西北大学の交換留学生の宿泊施設として、4 人の留学生が生活している。

また、女子留学生向けに混住型学生寮（収容人数約 40 人）も用意しており、平成 27 年 3 月よりブルガリア、ヴェリコ・タルノヴォ大学からの交換留学生 3 名が居住している。

【今後の展望】

新しく組織された「グローバルセンター」が中心となり、引き続き新規の海外プログラム策定、海外大学との連携強化、受入留学生のフォローなど全学のグローバル化を推進していく。

また、教職員向けに Skype による個別レッスン、語学自習システム利用促進を図り、教職員全体の語学力伸長を目指していく。

および、増加する留学生向けのゲストハウスの増床等も平成 27 年度中に整える予定である。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

2. グローバル人材として求められる能力を育成するための大学の特色に応じた取組

2-1. 地域連携による人材育成“Gunma Global Project Work”

2-1-1. グローバル人材育成推進協議会の形成

地域のグローバル人材育成を目的として、予定していた伊勢崎市教育委員会、サンデン株式会社、早稲田大学社会連携研究所に加え、社会連携教育に実績のある明治大学文明とマネジメント研究所と共に、「グローバル人材育成推進協議会」を平成 25 年 2 月に発足。事務局を本学 GL 推進本部が担当し、発足にあたっては、設立趣意を確認し、同協議会規約を制定した。また、各団体より代表者、運営委員を選任し、その運営を円滑に行う体制を整えた。

さらに、本協議会の学内、地域認知を高めるため、キックオフイベントを平成 25 年 2 月 26 日に開催し、学生はもとより地域社会人、地域児童生徒の保護者を始めとする地域社会に本協議会の存在・意義をアピールし、以後の活動の契機とした（参加者約 60 名）。

2-1-2. グローバル人材育成プログラムの開発と実施

上述協議会は各々協働し、グローバル人材育成プログラムを開発し以下のプログラムを実施した。

■平成 24 年度

≪グローバル企業見学研修/サンデン㈱のアジア海外拠点への視察研修プログラム≫

▸実施日　平成 25 年 3 月 3 日（日）～9 日（土）
▸参加学生人数　10 人
▸実施場所　タイ、シンガポール、マレーシア
▸内容
・現地大学生との交流（バンコク）
・シンガポール国立大学訪問
・サンデン㈱　タイ、シンガポール事務所訪問（工場見学、現地スタッフによる海外勤務についてのレクチャー、現地スタッフと共に行うグループミーティング等）

■平成 25 年度

≪ﾐｯｼｮﾝｺﾝﾌﾟﾘｰﾄ研修/サンデン㈱のｱｼﾞｱ海外拠点を活動拠点とした課題解決型ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ研修≫

▸実施日　平成 26 年 3 月 2 日（日）～3 月 15 日（土）
▸参加学生人数　12 人
▸実施場所　バンコク郊外、タマサート大学、サンデン㈱アユタヤオフィス
▸内容
・海外大学体験研修
・サンデン㈱他企業より現地マーケティング等の課題を提示され、それを現地の方へのヒアリング等により解決手法を模索する。また同時にビジネス視点での考え方を実務担当者より学ぶ

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

≪海外研修サポートインターン/伊勢崎市教育委員会と連携する海外ｻﾎﾟｰﾄｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ研修≫

▸実施日　平成 25 年 8 月 4 日（日）～8 月 17 日（土）
▸参加学生人数　5 人
▸実施場所　ミズーリ州立大学（アメリカ）
▸内容　・伊勢崎市内中学生のアメリカ語学研修に同行し、現地のみならず事前事後研修における教員の仕事をサポートしながら就業体験をする

≪グローバルビジネスセミナー≫

▸講師：　アメリカ大使館広報部特別補佐官　クリスティン・シン　氏
・実施日　平成 25 年 5 月 14 日（火）　18:00-19:30
・講義内容　「アメリカにおける多文化主義」
・参加学生人数　66 人

▸講師：　駐日ブルガリア共和国大使館書記官　ダニエラ・ニコロヴァ　氏
日本ブルガリア経済委員会事務局長　佐々木　文徳　氏
・実施日　平成 25 年 10 月 10 日（金）　10:30-12:00
・講義内容　「ブルガリアン・コネクション　～文化・経済・人でつなぐ2国間～」
・参加学生人数　60 人

▸講師：　駐日ブルガリア共和国大使　ゲオルギ・ヴァシレフ　氏
・実施日　平成 25 年 11 月 13 日（水）　14:20-15:50
・講義内容　「ブルガリアの魅力　～その歴史・文化・人～」
・参加学生人数　320 人

▸講師：　サンデン株式会社　タイ現地法人代表　中澤　健治　氏
・実施日　平成 25 年 11 月 25 日（月）　18:00-19:30
・講義内容　「Global Leadership」
・参加学生人数　30 人
※グローバル人材育成推進協議会活動の一環として、同内容を、同日 14:00 より、伊勢崎市立第 3 中学校（参加 120 人）において実施。

▸講師：　株式会社ジェイアイエヌ　代表取締役　田中　仁　氏
株式会社コシダカホールディングス　代表取締役　腰高　博　氏
相模屋食料株式会社　代表取締役　鳥越　淳司　氏
・実施日　平成 25 年 12 月 19 日（木）　16:00-18:00
・講義内容　「Gunma Innovation Meeting in University　第 1 回　地域と世界をつなぐグロ―カル・マインド」
・参加学生人数　340 人

≪副専攻 Global Skills 科目群への企業人受入による社会人視点からのグローバル人材育成支援≫

▸受入人数　平成 25 年度 8 人（サンデン㈱）

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

≪児童向けグローバル教育ワークショップ/グローバルな人材を育てる人材の育成≫

▸実施日　平成 25 年 6 月～8 月
▸参加学生人数　6 人
▸実施場所　共愛学園前橋国際大学　4号館（Kyoai Commons）
▸内容　伊勢崎市教育委員会と共催する小学 6 年生受けのワークショップを企画、運営

≪ティーチング・アシスタントプログラム≫

▸実施日　年間 7 週間（1 週間交代/7 人が参加）
▸内容　伊勢崎市内学校における外国籍児童向けに、学生による恒常的な日本語の授業ティーチング・アシスタントプログラム

≪児童英語教師養成プログラム「小学校外国語活動」≫

▸実施日　平成 26 年 2 月 4 日（火）～2 月 12 日（水）
▸参加学生人数　30 人
▸内容　・小学校英語教育の位置づけ、目標・指導内容を学ぶ

≪その他≫

▸群馬県国際戦略を基盤とするプログラムへの留学生や学生の参加
▸群馬県の戦略の1つである海外におけるｲﾒｰｼﾞｱｯﾌﾟを図るための学生団体「いいとこ伝え隊」への本学留学生の参加(平成 25 年度：2 名)
▸上記群馬県海外広報として、多言語化した県の紹介ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄを本学学生が、留学先で配布
▸グローバル人材育成シンポジウムにて、群馬県国際戦略課長より「群馬県の求めるグローバル人材とは」のテーマで講演（平成 26 年 3 月 6 日）

■平成 26 年度

≪GEO（Global Education Online-project）実証実験】≫

▸実施日　平成 26 年 11 月～平成 27 年 1 月
▸参加学生人数　10 人
▸実施場所　共愛学園前橋国際大学 4 号館、サンカルロス大学（QQ English セブオフィス）
▸内容　・Skype、遠隔映像システムを利用した PBL。1つのテーマ（ジェンダーについて等）を軸に双方プレゼン後、ディスカッションし、双方の考え方の共通点、違い等を体感することにより異文化理解力を高める。
※今年度は今後の授業化に向けた実証実験であり、希望者のみによる特別講座（単位付与なし）の位置づけ

≪サンデン㈱のｱｼﾞｱ海外拠点を活動拠点とした課題解決型ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ研修 【参考資料④】≫

▸実施日　平成 27 年 2 月 15 日（日）～2 月 28 日（土）
▸参加学生人数　7 人
▸実施場所　バンコク郊外、タマサート大学、サンデン㈱アユタヤオフィス
▸内容　・海外大学体験研修
・サンデン㈱他企業より現地マーケティング等の課題を提示され、それを現地の方へのヒアリング等により解決手法を模索する。また同時にビジネス視点での考え方を実務担当者より学ぶ

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

（左）現地の人へインタビューを実施している様子、（右）グループでまとめた結果をプレゼンしている様子

≪伊勢崎市教育委員会と連携する海外研修サポートインターン 【参考資料③】≫

▸実施日　平成 26 年 8 月
▸参加学生人数　4 人
▸実施場所　ミズーリ州立大学（アメリカ）
▸内容　・伊勢崎市内中学生のアメリカ語学研修に同行し、現地のみならず事前事後研修における教員の仕事をサポートしながら就業体験をする

（左） 総勢 70 人の中学3年生と現地入り、（右）日本文化紹介のお祭り開催に当たり、会場設営サポート

≪グローバルビジネスセミナー≫

▸ゲスト　元大相撲力士　琴欧洲親方（現　鳴戸親方）
・実施日　平成 26 年 6 月 23 日（月） 14:20-17:00
・講義内容　「ブルガリアと私」
・参加学生人数　340 人

▸講師　日本ブルガリア経済委員会事務局長　佐々木　文徳　氏
・実施日　平成 26 年 10 月 16 日（木） 10:30-12:00
・講義内容　「政治・経済から見るブルガリア私論」
・参加学生人数　34 人

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

▸講師　　伊勢崎市教育委員会　学校教育課　指導主事　町田　博幸　氏
・実施日　　平成 26 年 1 月 20 日（火）　18:00-19:30
・講義内容　　「海外で働く、Be a Global Leader」
・参加学生人数　　41 人

≪児童向けグローバル教育ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ/グローバルな人材を育てる人材の育成 【参考資料②】≫

▸実施日　　平成 25 年 5 月～8 月
▸参加学生人数　　7 人
▸実施場所　　共愛学園前橋国際大学　4号館（Kyoai Commons）
▸内容　　伊勢崎市教育委員会と共催する小学 6 年生受けのワークショップを企画、運営する

（左）ワークショップの内容を決める事前研修の様子、（右）42 名の児童が参加したワークショップ当日の様子

≪児童英語教師養成プログラム「小学校外国語活動」≫

▸実施日　　平成 27 年 2 月
▸参加学生人数　　12 人
▸内容　　・小学校英語教育の位置づけ、目標・指導内容を学ぶ

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

2-2. Global Career Training 副専攻

グローバル人材に必要とされる語学力、理論・スキル、実践を修得するため、語学を学ぶ Global Language Intensive、理論とスキルの Global Skills、実践学修の Global Project Work の 3 科目群で構成する副専攻を教育課程に位置づけるため、「Global Career Training 副専攻設置規程」、「同運用内規」を制定した。規定の単位数を修得することにより、修了証が交付される正式カリキュラムとして平成 25 年度より運用することとなった。上述の Global Skills 科目群は英語によるアクティブ・ラーニング授業となり、上述のように社会人も履修している。

これに伴い、履修登録、修了証の発行、本学では初となる夜間（18:00-19:30）開講等に対応するよう、教務システム等の設計を行い、必要な更新作業を行った。加えて、「履修の手引き」の改訂や専任教員が担当する科目以外の非常勤講師の手配、シラバスの作成を実施した。

2-2-1. 科目群の構成

- Global Language Intensive（語学）

科目名	H25 受講者数	H26 受講者数
One on One English	100 人	92 人
Speaking of Japan Ⅰ、Business English Ⅰ、他 26 科目	786 人	721 人
Academic Writing	－	15 人
累計	886 人	828 人

- Global Skills（理論・スキル）

6 限に開講する英語による授業。英語習熟度別に各科目 2 クラスで運営。
※（）数は社会人受講者数

科目名	H25 受講者数	H26 受講者数
Global Leadership Ⅰ	34 人	33 人
Multi-Cultural Communication	67 人(4 人)	54 人(3 人)
Team Based Learning Ⅰ	29 人	55 人
Problem Based Training Ⅰ	30 人	10 人
Global Business Training Ⅰ	44 人	30 人(3 人)
Global Leadership Ⅱ	16 人	16 人
Multi-Cultural Understanding	54 人(5 人)	49 人
Team Based Learning Ⅱ	22 人	48 人
Problem Based Training Ⅱ	31 人	7 人
Global Business Training Ⅱ	24 人	17 人(1 人)
累計	351 人(9 人)	319 人(7 人)

- Global Project Work（実践）

科目名	H25 受講者数	H26 受講者数
児童向けグローバル教育ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ	6 人	7 人
ミッションコンプリート研修	10 人	7 人
海外研修サポートインターン	5 人	4 人
アジア異文化研修	－	36 人
累計	21 人	54 人

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

新規科目群である Global Skills においては、対象学生（TOEIC400 点以上）317 名中 104 名が履修（平成 25 年度）。また、今年度より開講した Global Language Intensive の「One on One English」、Global Project Work の履修者もそれぞれ 100 人、21 人が履修する結果となり、学生の知識欲を満たすことはできたと思われる。および、Global Skills 科目における履修学生の授業満足度も授業全体平均と比べ、13.3 ポイント高く、内容においても評価された（平成 25 年度）。この傾向は平成 26 年度も変わっていない。

また、新設の Global Skills 科目群は、本学の理念と目的を具現化し、カリキュラムの中心をなす「共愛コア科目」に認定されており、本学カリキュラムの柱の一つに位置づいている。加えて、本学にとって初めての 6 時間目の開講、社会人の合同受講、全て英語によるアクティブ・ラーニングであるという全く新たな特徴を持つものであるが、上述のように数多くの履修者を得て実施出来たことは成果といえる。

平成 27 年度より、語学力伸長に向け、全体の約 2 割の学生を擁する国際コースにおいて One on One English を選択必修科目にすることとした。

2-2-3. グローバル人材へ成長する学生支援

本事業活動に参加した学生の中には、海外での就業を意識した学生も増えてきた。そのような学生に対し、上述 GL 事務局専門員がアドバイス等をしたことにより、アジア諸国において就業を前提としたインターンシップに参加する学生も出てきた。

また、留学生の支援としては、留学生歓迎会、留学生会旅行、留学生会合同クリスマス会、留学生日本語スピーチコンテスト等を実施した（平成 25, 26 年度）。併せて現在、留学生の受入体制を強化すべく、現状の女子混住型専用学生寮、ゲストハウスに加え、新たな学生寮を平成 27 年度中に整えることを検討している

2-2-4. 地方小規模大学であること

地方小規模大学のモデルケースとしての積極的な事例広報を各所で行った（GO GLOBAL JAPAN EXPO、NEW EDUCATION EXPO、 ABEST21-QMC セミナー他、各種取材対応、各種広告宣伝）。および、平成 24 年度 2 大学、平成 25 年度 8 大学、平成 26 年度 9 大学の来学視察を受け入れた。

【今後の展望】

本学の特長である副専攻科目を計画通りに、充実させていく。また、更なる科目充実に向け、同じく本事業に採択された杏林大学、語学教育に力を入れている実践女子大学と連携し、海外大学の学生と日本側の学生が Skype によりグローバルな課題についてディスカッションを交わすグローバル科目の実証実験を平成 26 年度に行った。平成 27 年度に課題点を洗い出し、追加の実証実験を踏まえ、平成 28 年度より正式科目として開講をめざす。

また、地域の商工会議所、地元企業と連携して、地域が求めるグローバル人材要件を導き出し、その要件を満たすカリキュラム改定を行い、人材の輩出を努めていく。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

3. 教員のグローバル教育力の向上の取組

3-1. 教育体制のグローバル化

3-1-1. 外国人教員等の採用等によるグローバル化

教育体制のグローバル化を図るために、まずは副専攻 Global Skills 科目群を主に担当する外国人教員等を平成 25 年に 2 人採用した。このうちの 1 人は、アジア圏への積極的交流を図る群馬県の国際交流を視野に入れ、北京大学で博士号を取得し、ダブルディグリープログラムで早稲田大学にも在籍した後、アジア開発銀行研究所において ASEAN に係るプロジェクトを担当していた英語力の高い中国人教員を採用した。また、平成 26 年度も 1 人採用した。

これにより、平成 26 年度の外国人教員等比率は、本事業採択前の 43.8%から 48.5%に上がった。引き続き、平成 27 年度に外国人教員等を 1 人採用し、かつ、本学サバティカル制度を推進することにより、平成 28 年度には外国人教員等割合を 5 割にしていく予定である。

また、上述の通り、大使館関係者、在外企業人等を招きグローバルセミナーを実施し、学生と意見交換する場を設定することにより、学生のグローバルマインドの醸成を図った。

3-1-2. グローバル化を促進する授業方法

平成 25 年 2 月の導入トライアルを経て、平成 25 年度新規科目として、Skype を活用した在フィリピン講師との 1 対 1 の英語レッスンと話す・聞く・書くの英語能力を高める e-ラーニングを組み合わせた「One on One English」を開講した。1 対 1 の英語レッスンは計画通り、カラン・メソッドを導入した。また、学生の利便性を高めるため、Skype 利用可能な語学学修ブース（20 席）を平成 24 年 12 月に設置した。なお、平成 25 年度の「One on One English」は前後期合わせて本学在籍学生の約 10%となる 100 人が受講した（平成 25 年度は 92 人）。

受講学生は受講前と比べ TOEIC スコアは平均 24.9 ポイント伸び、特に顕著な学生は 100 ポイント以上もスコアが伸びた。伸びが小さかった学生においても、テストでの問題文読み上げにおいて、以前より聞き取れるようになってきたという声が多く、Listening 能力開発の下地はできたかと思われる。

なお、OCW については、MOOC が世界的に広がりを見せている現状を踏まえ、MOOC 導入の可否を含めて、検討作業に入っている。

3-1-3. 教員の研修

教員の海外研修としては、平成 25 年度に心理学教育を担当する教員がローザンヌ大学において、発達障害学生の相談技法ならびに心理学のアクティブ・ラーニング授業実施技法を学ぶワークショップ研修に参加した。

なお、補助事業によるものではないが、平成 24 年度には、専任教員 1 名が本学独自のサバティカル制度を利用し、ニューヨーク市立大学に赴き、授業参観等を経て自身の教育力向上を図った。

および、グローバル教育力向上のために、平成 26 年度の授業開発研究会（全学 FD 研修）は、ナンバリング制度をテーマとした。平成 27 年度のナンバリング制度導入にあたり、現在検討を進めているルールにもとづき、各科目にナンバーを振るワークショップを全教員並びに担当職員で実施した。このことを通して、ナンバリング制のしくみや意義を共有すること、また、自らの科目の位置づけを確認すること、コースや学部のカリキュラム体系を再度見直すことになった。これにより、本学のカリキュラムの国際通用性の現状を確認しつつ、さらなるカリキュラム改善につなげることを意図しており、FD とし

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

て大変有効な取り組みとなった。

【今後の展望】
　平成 27 年度中に外国人教員を 1 人採用し、当初の外国人教員等の目標人数に近づけていく。
　また、1 対 1 英語レッスンを一部コースにおいて、選択必修化していくことにより、全学に対する語学学修強化環境を向上させていくこととする。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

3-2. グローバル教育力向上のための取組

3-2-1. FD による改善、評価の取組

アクティブ・ラーニング等の効果をマネジメントすること、カリキュラムを体系的に整えることを推進するために、毎年開催される授業開発研究会（FD 研修会）において、関西国際大学の山下副学長を講師に招き、「教学マネジメント」について学んだ。研修においては、実際にルーブリックを運用するグループワークを体験した。なお、この FD 研修会は、連携協定を締結している公立大学法人前橋工科大学との共同開催とし、前橋工科大学長以下複数の教職員が来学し、参加した。

また、平成 24 年度に導入したアクティブ・ラーニング機器（クリッカー、授業録画システム等）の使用方法につき、教員向け勉強会を実施し、より効果的なアクティブ・ラーニング授業実施に向けた下地作りを行った。

同時に、授業の実質的な改善に向け、クリッカー機器を使用し、実際の授業における集中度、理解度を測定し、アクティブ・ラーニングの効果を分析した。この効果分析を今後各教員と共有することにより、更に個々の授業の質を改善していく予定である。

3-2-2. グローバル教育力の向上

本学サバティカル制度を利用し、平成 24 年度に 1 人の教員がニューヨーク市立大学に赴き、教育指導法等を学び、海外で自身の知見を深めてきた。
また、海外での論文発表等を支援するための、論文翻訳等のヘルプデスクを平成 25 年度 GL 事務局内に設置した。平成 25 年度には、2 人の教員がそのヘルプデスクを利用した。

【今後の展望】

導入したアクティブ・ラーニング機器について、上述の通り、使用方法など説明会を実施した後、授業の質保証に向け、利用し始めている。今後はこの機器を使用した教員のノウハウを横展開するなどし、全学的に導入した機器を使用し、効果的なアクティブ・ラーニングを実施していく。

また、計画通り授業実践をまとめた「共愛学園前橋国際大学 Good Practice」を作成し、様々なノウハウを非常勤講師も含め全学的に共有するとともに、平成 27 年度、28 年度に海外大学からの講師招聘による FD 研修を実施する。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

4. 日本人学生の留学を促進するための環境整備

4-1. 日本人学生に対する動機付けや、留学を促進するための取組

4-1-1. グローバルセンター、および体制の充実

前述の通り、グローバルを意識した組織として、「国際交流センター」、「留学生支援センター」を統合して「グローバルセンター」を設置した。この「グローバルセンター」と GL 人材育成推進本部アウトバウンド WG が協働することにより、海外に学生を送り出す各取組を行った。

具体的には、海外大学との MOU・協定数を増やし（GGJ 事業開始前まで 3 校→平成 26 年度末 13 校）、交換留学校数を増やし（GGJ 事業開始前まで 1 校→平成 26 年度末 3 校）、かつ、留学ガイダンスの充実などを行った。

また、既に実施しているネイティブ教員とのカフェレッスン「English Coffee&Talk」に続き、お菓子など食べながら学生が留学前に気軽に参加できる語学レッスンの場として、「Drink English」（平成 25 年度後期）、「ニーハオ中国語」、「Petit Café Francais」（平成 26 年度前期）を始めた。

4-1-2. 奨学金制度の充実

平成 25 年度にコース別の奨学金制度を整え、海外留学が必修である英語コースにおいては、留学費用として奨学金を支給する制度とした。

4-1-3. 入学前プログラム

新入生は全員が入学直後に TOEIC を受験するが、ほとんどの学生が TOEIC 初受験のため、事前に TOEIC について知り、戸惑うことなく受験できるようにするため、任意の入学予定者向け入学前 TOEIC 講座を平成 24 年度末、平成 25 年度末に実施し、TOEIC スコア UP も狙った。

また、語学力、グローカル人材としての資質を伸ばすために留学体験は非常に重要であることに鑑み、より留学に興味を持ってもらうことを目的とし、入学前の留学ガイダンスを平成 24 年度末、平成 25 年度末に実施した。

この入学前留学ガイダンスには新入生の約 20%が参加し、アンケートの結果、そのうち約 98%が海外留学への意向を示した。また、入学前 TOEIC 講座には新入生の約 35%が参加し、そのうち約 99%が役に立ったとの回答であった。難易度においては、過半数が少し難しかったとコメントしており、語学学修でのストレッチとしては適度で会ったかと思われる。（平成 25 年度アンケート結果より）
また、アンケートを取ることにより、留学に行くことに対する阻害要因等も把握することができ、今後のプログラム策定に向け有効であったといえる。具体的には留学への敷居の高さを解消するためのエントリーモデルの導入、留学に対する漠然とした不安を解消するための留学経験者の報告を含む事前説明会・研修の充実等を実施してきた。

4-1-4. 海外留学プログラムの充実

平成 24 年度には単位取得を伴う海外留学として、5 方面の短期中期のプログラム、2 方面のフィールドワークを実施し、平成 25 年度には、学生の選択肢の幅を広げるため、海外インターンシップ、課題解決型研修を新たに開設した。加えて、平成 24 年度・25 年度には西北大学（中国）との長期交換

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

留学を実施、これに加えて、平成 26 年度からは、単位取得を伴う長期の留学（アメリカ）、異文化体験研修（タイ、台湾）、ヴェリコ・タルノヴォ大学（ブルガリア）との交換留学制度を開始した。

【平成 26 年度海外留学一覧：計 149 人】

内容	行き先	H25 参加人数	H26 参加人数
語学留学・研修	カナダ	24 人	19 人
	中国	9 人	6 人
	ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ	15 人	7 人
	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	21 人	47 人
	アメリカ	19 人	2 人
海外フィールドワーク	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	11 人	10 人
	韓国	9 人	5 人
ブルガリア短期交換留学		―	13 人
海外研修サポートインターン	アメリカ	5 人	4 人
課題解決型ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ研修	タイ	10 人	7 人
アジア異文化研修	タイ	11 人	23 人
	台湾	9 人	13 人
合計		123 人	149 人

【今後の展望】

学生の留学意欲を満たし、かつ、選択肢を増やすため留学プログラムを拡充していく。具体的には、英語・中国語以外の語学習得を目的とする韓国語学研修、児童教育コースの学生向けの海外ティーチング研修、フィールドワーク学修コースの拡充としての台湾フィールドワーク、欧州圏で初めてとなる英国語学研修、フランス語学研修プログラムを（平成 27 年度夏季・春季）。

更に、国内にいながら、留学を体験できる Global Education Online 科目（海外大学生と Skype 等を利用し、統一テーマをディスカッション）の実証実験を平成 26 年度に続き、平成 27 年度も更なる精査として実証実験を行う。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

4-2. 留学中から帰国後にわたるサポート体制

4-2-1. 留学生のサポート体制の充実

グローバルセンターに専門員を増補したことにより、オリエンテーションから帰国後のフォローまで、これまで以上に細やかな支援体制を平成 25 年度より取り組むことができた。
SNS の活用では、学生同士が十分なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝをとり、海外滞在中の連絡等にも有効であること、また帰国後の振り返りや情報共有、互いの感想の交換等を可能とし、より深い学びにとって有効であった。
さらに Skype 等を使用することにより、対面で留学学生へのアドバイスを実行することができ、学生の不安感を払拭することに有効な手段であった。

4-2-2. 緊急時対応の強化

既存の「共愛学園前橋国際大学危機管理規程」の見直しのため、各種資料等を取り寄せ検討したが、現段階では改訂の必要性はなかった。なお、留学先の状況は常に把握し、学生対応をしている。
具体的には、平成 26 年春のタイへの課題解決型インターンシップ研修において、行き先であるタイの首都バンコク情勢が不安定であったため、急遽研修場所を当初予定であったバンコクよりプーケット島に変更し、かつ、保護者を含めた説明会を実施した。
また、派遣学生はすべて日本アイラックに加入しており、些細な相談から緊急案件まで 24 時間で対応できる環境となっている。

4-2-3. 産業界との連携

上述の通り、サンデン㈱と連携し、課題解決型インターンシップ研修（ﾀｲ法人）、海外研修サポートインターン（ｱﾒﾘｶ法人）のプログラムを実施した。また、タイ法人代表を招きセミナーを行い（平成 25 年度）、副専攻においてはサンデン社員の受講を受け入れた。
平成 24 年度末には、前橋商工会議所が運営する地元の中小企業が属する「ものづくり指南塾」において、今現場で起きているグローバル人材のニーズ等に関する情報共有を実施し、平成 26 年度には地域が求めるグローカル人材要件につき共同で研究する組織を立ち上げた。また毎年度末実施している学内就職ガイダンス（約 80 社が参加）にて、各企業の人事担当者と専門職員がグローバル人材の就業について、意見交換を行っている。さらに、前橋市に本社を置く㈱ジェイアイエヌとグローバルビジネスセミナーでの講演、シンポジウムでのパネリスト参加、外部評価委員への就任等で連携している。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

5. 語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組

5-1. 入試における中等教育段階までの外国語力・留学経験等の適切な評価

5-1-1. 外部試験の入試への活用

平成 26 年度入試までは、TOEFL/TOEIC、英検等の外部試験を推薦資格等に利用してきた。平成 27 年度入試より、一般入試にも拡大し、以下のとおり外部試験の一定の点数を有している受験生は、英語科目を満点に換算する制度を導入した。

平成 27 年度入試では 3 人がこの制度を利用した。

外部試験	<推薦入試> 推薦資格	<一般入試> 英語科目 満点換算
実用英検	準 2 級	準 1 級
GTEC for STUDENTS	500 以上	620 以上
GTEC CBT	720 以上	920 以上
TOEIC	400 以上	600 以上
TOEFL　iBT	40 点以上	64 以上

※英語科目満点換算は、一般入試、スカラーシップ入試が対象

5-1-2. 留学経験の重視

高校生の留学経験については、教授会において推薦入試で活用することを承認した。もっとも、高校生の留学経験はその中身（質）が重要であり、その内容を十分に評価できる評価指標について、現在検討中である。

なお、入学時からの語学力向上を図るための、入学者向け入学前 TOEIC 講座を平成 25 年度入学者より実施した。平成 27 年度入学者においては、入学予定者の過半数にあたる 120 人が受講した。

【今後の展望】

海外からの留学生受入、並びに国内におけるバカロレア取得者の受入を念頭に、国際バカロレアを受験資格とする入試制度を平成 28 年度までに導入する。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

5-2. 卒業時の外国語スタンダードを見据えた効果的な語学教育及び教育体制

5-2-1. 入学時プレイスメントテスト等

既に実施している習熟度別語学クラス編成に続き、副専攻の Global Skills 科目において、定期的に受験している TOEIC スコアを基準に、400 点以上 595 点以下、600 点以上の 2 クラス編成を敷いた。

なお、前述の Skype を利用する 1 対 1 の語学レッスンである「One on One English」科目は、個々の学生に対応する授業であり、究極の習熟度別語学授業となる。

5-2-2. 外国語論文作成能力等の育成と留学前準備

学生の英語による論文能力養成に向け、副専攻 Global Language Intensive 科目群に「Academic Writing」を平成 26 年度後期より開講する。

また、留学前準備としての語学力伸長に関しては、専任スタッフで構成する「外国語センター」によるサポート、自学自習できる e-ラーニングの環境を整備することで対応している。今回準備した e-ラーニングは今までの「書く・聞く」のみならず「話す」にも対応しているものであり、より語学上達に役立つものとなっている。

加えて、留学前の語学力向上として、ネイティブ教員を交えた「English Coffee&Talk」、現地での日常会話に慣れるため、昼休みなど利用したカフェレッスン「Drink English」（平成 25 年度より）、「ニーハオ中国語」（平成 26 年度より）を始めた。

また、日々専任スタッフを配置する「外国語センター」では外国語習得に向けたアドバイス等を学生に行っている。

一方、平成 27 年度より語学力 UP の効果が認められている 1 対 1 の英語学修である「One on One English」を国際コースの選択必修として、より受講する学生を増やし、全体の語学力の底上げを図っていく。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

【参考資料①　中間評価結果】

日本学術振興会 HP　「中間評価結果」より

スーパーグローバル大学等事業　経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援
中間評価結果

大 学 名	共愛学園前橋国際大学
申請区分	タイプＢ：特色型

◇経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価） S	優れた取組状況であり、事業目的の達成が見込まれる。

（コメント）

「次世代の地域社会を牽引するグローカルリーダー」育成という目的に向けて着実な取組が見られる。地元企業・自治体と密接に連携しながら人材の育成に努めるとともに、様々なプログラムを準備し、学生の背中を押し動機を高めて海外に送り出すことで、更にやる気を引き出し、その成果として英語力の向上も見られる。県内の学生を引き受け、実力を育み県内に返すという役割も明確であり、卒業生が地域の企業、公共団体、学校等で活躍することで、地域の国際化が図られるであろうことが期待でき、いわゆる地方・小規模大学の一つの成功モデルとして高く評価できる。

大学独自の指標として「グローカルポイント」を設定し、大学全体での教育成果を向上させており、今後、個々の学生の成長を確認できるよう、学修成果の可視化を推進すると同時に、GPA が低い学生に対する指導等に力を入れようとしている。

Learning Commons を中心とするアクティブ・ラーニングのための校舎の建設等を通じて大学の学修環境が再編され、ガラス張りの建物の中で互いに学び合う場が築かれており、十分に活用されている。学生が大学の変貌を実感し満足度が高く、各種プログラムに参加後、学修へのモチベーションが向上している。また、社会人に開放するために、午後６時以降に Global Skills を開講するなど、地域との結び付きも強い。

更に、地域の中学生を海外に派遣する際のプログラム作成、付き添い等を行うインターンシップが、学生の体験的な教育実習にもなっており、国際化と同時に教職等職業選択への強い動機付けになっている。

【参考資料②　H26/8/3-4　児童向けグローバル教育ワークショップ】

≪概要≫

伊勢崎市内の小学６年生向けに、伊勢崎市教育委員会と協働して、グローバル教育ワークショップを開催。児童に海外を身近に感じてもらうワークショップを学生が企画、運営した。

≪目的≫

児童に学びの場を提供すると共に、学生が自ら地域児童の事を考え、企画を立案、運営することを通して、グローカルリーダーの資質である主体性・積極性、責任感・使命感、および地域人としてのアイデンティティを育むことを目的とする。

【事前企画立案ワーク】

▸実施日　5/31（土）、6/21（土）、7/12（土）、7/19（土）、7/26（土）、8/6（水）
各日 13:00 - 17:00

▸内容　ファシリテータを招き、小学６年生向けの企画をゼロベースから立案。また、伊勢崎市教育委員会の指導主事の訪問を受け、企画内容に指導を受けながら討議を行った。

【企画運営ワーク】

▸実施日　8/7（木）、8/8（金）　9:00 - 17:00

▸実施場所　共愛学園前橋国際大学　４号館（Kyoai Commons）

▸内容　（１日目）アイスブレイク、世界のお菓子クイズ・試食、World Trip（6 か国のブースをまわってみよう）
（２日目）ジェスチャーゲーム、旅行プランの作成、作成旅行プランの発表、思い出フレームづくり

▸参加者　本学学生　7 人　、伊勢崎市の児童　42 人

≪参加学生自己評価≫　※5 点満点

主体性	3.86
働きかけ力	3.00
実行力	3.57
課題発見力	3.57
計画力	3.57
創造力	3.57
発信力	3.57
傾聴力	4.00
柔軟性	4.00
状況把握力	3.57
規律性	3.57
ストレスコントロール力	4.00
語学力	3.29
TTL	3.63

（上）　事前研修にて各パートごとに企画詰め

（右上）お菓子クイズに挑戦する児童の様子

（右）　学生が各国の文化・生活などをレクチャー

≪成果、所感≫

参加児童の多くの保護者より、子供が非常に楽しくグローバルを体感できたようで、またこのような機会があればぜひ参加させたいとの意見をいただいた。

また、事後レポートによると、事前準備における自身の統制力・実行力のなさにが改めて気がついたという意見が多く見受けられたが、当日の児童との触れ合いや 2 日間をやりきったという達成感がそれらを大きく上回り、全員が自分に自信がつき、成長したと述べている。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

【参考資料③　H26/8/6-15　海外研修サポートインターン】

≪概要≫

伊勢崎市で行われている市内中学生を対象とした海外語学研修に本学学生がサポートインターン（引率支援）として参加。

研修先は伊勢崎市の姉妹都市であるアメリカ・ミズーリ州スプリングフィールド市のミズーリ州立大学及びテキサス州ダラス近郊のサンデン株式会社の現地法人サンデン・インターナショナル USA。学生は、70 名の参加中学生を引率支援。

≪目的≫

教員、教育に関わる仕事への就業を意識した学生向けに、教員と共に中学生の研修に引率することにより、教育者として生徒への関わり方を学ぶことを目的とする。

【事前事後研修】

▸実施日　5/10（土）、5/20（火）、6/14（土）、6/26（木）、7/23（水）、8/22（金）、8/30（土）、9/6（土）　※最終日は帰国報告報告会

▸内容　事前研修では、研修会場準備や司会進行やアクティビティの練習相手となり支援。帰国後は、事後研修の会場設営や受付、会場案内の支援や中学生のプレゼンテーションの指導をする教員と共に支援した。また、帰国報告会では、会場設営や会場案内、学生によるプレゼンテーションを行った。および、今回の研修では伊勢崎市広報課とコラボレーションして、伊勢崎市中学生海外研修の特集記事を広報いせさきに掲載。学生 4 名と有志中学生で、紙面の企画、取材、編集を行った。（10 月 1 日号広報いせさき掲載）

【アメリカ本研修】

▸実施日　8/6（水）～15（金）

▸実施場所　ミズーリ州立大学、サンデン・インターナショナル USA

▸内容　集合時の点呼や移動の際の安全確認、日本文化を紹介するアクティビティでは会場設営を支援。授業面では、パワーポイントの使い方などサポートした。帰国の際には、寮のチェックアウトやホテルのチェックイン、チェックアウトを支援した。

▸参加者　4 人

事前研修：入国管理官役に挑戦

日本紹介フェスティバルの準備（ミズーリ）

≪参加学生自己評価≫　※5 点満点

主体性	4.00
働きかけ力	3.25
実行力	4.00
課題発見力	3.50
計画力	3.50
創造力	4.00
発信力	3.25
傾聴力	4.00
柔軟性	4.25
状況把握力	4.00
規律性	3.75
ストレスコントロール力	3.75
語学力	3.75
TTL	3.75

≪成果、所感≫

大学のテスト期間の関係で中学生とは少し遅れて現地合流となり、中学生の輪の中になかなか入っていけない様子も見受けられたが、数日で慣れ自分たちの立ち位置やするべきことを学んだ様子であった。研修前半は、指示されるまで何もできない様子が度々教員から注意されていたが、自分から状況を把握することや臨機応変な対応の大切さを促すことで、研修後半では自分から動く、働きかける姿勢に少しずつ変化がみられるようになった。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

【参考資料④　H26/2/15-28　ミッションコンプリート研修】

≪概要≫

タイ王国にて、タマサート大学での語学・異文化理解研修および株式会社 JIN-G 主催のミッションコンプリート研修を実施した。学生は与えられた複数の課題の解決に個人あるいはグループで取り組み、最終日には現地法人サンデンタイランドで発表の機会を頂いた。

≪目的≫

海外で社会人疑似体験をすることにより、学生自身の見識を広め、勉学の充実と進路実現に役立てることと、グローカルな視野を持ち社会に貢献できる人物の育成とを目的とする。

【事前・事後オリエンテーション】

▸実施日　12/2, 9, 16, 1/6, 13（以上すべて火曜日・各日 12:10 - 12:30）、
1/16（金）8:00 - 15:00（サンデン工場見学）、
2/2（月）10:00 - 11:00（JTB 実施）、2/12（木）8:50 - 10:20（JIN-G 実施）
3/23（月）17:00 – 17:30

▸内容　海外研修に向けて事前準備を行い、帰国後は研修の振り返りを行った。

【本研修】

▸実施日　2/15（日）～2/15（土）

▸実施場所　Language Institute Thammasat University, Sanden (Thailand) Co., Ltd.

▸内容　（1 週目）タマサート大学での語学・異文化理解研修
（2 週目）株式会社 JIN-G 主催のミッションコンプリート研修

▸参加者　本学学生　7 人

≪参加学生自己評価≫　※5 点満点

主体性	4.00
働きかけ力	2.71
実行力	4.14
課題発見力	3.71
計画力	4.00
創造力	2.86
発信力	3.43
傾聴力	4.00
柔軟性	3.57
状況把握力	3.57
規律性	4.00
ストレスコントロール力	3.57
語学力	4.29
TTL	3.68

（左上）タイ語で自己紹介するべく原稿を練る学生

（右上）現地日系企業（飲食店）から
1 日で解決しなければならないミッションを
頂いているところ

（右下）　現地法人サンデンタイランドでの
プレゼンテーション

≪成果、所感≫

課題解決に取り組む姿を間近に見ていて、学生が加速度的に成長したのが感じられた。人見知りだった学生が人に話しかけるのを恐れなくなったり、プレゼンテーションが苦手だった学生が堂々と発表できるようになったりしたほか、全員がタイムマネジメントや PDCA サイクルの実践を自分のものとし、グループで協力するうちに他の声に耳を傾ける姿勢が身に付いたのではないかと思う。自己評価で計画力や傾聴力の点数が高いことがそれを裏付けている。今後、グローバルとローカル両方の視野に立ち、各々が志す分野で活躍することを期待できる。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY

【参考資料⑤　H26/9/3-11(ﾀｲ)，H27/2/9-15(台湾) アジア異文化研修】

≪概要≫

海外へ初めて出かける学生を主な対象とし、夏にはタイ王国で、春には台湾で、現地大学生との交流を中心にアジア圏の文化や歴史に触れる異文化理解研修を実施した。

≪目的≫

学生が本研修を通して異文化理解の端緒をつかむと共に、視野を広げ、自身の気づかなかった能力や可能性に気づき、帰国後にそれを伸長すべく大学生活を充実させること。

【事前・事後オリエンテーション（太字がタイ王国)】

▸実施日　**5/30（金）, 6/20（木）, 6/25（水）, 7/18（金）, 10/8（水）- 10（金）**
各日 17:40 - 19:00、6/25 のみ 12：00 - 12:35
11/26（水）, 12/9（火）, 12/11, 1/8, 1/15（以上 3 回とも木曜日)、
1/16（金)、1/17, 24, 31（以上すべて土曜日)、3/16（月）
各日 17:40 - 19:00, 12/9 12：00 - 12:35、
1/16 8:00 - 15:00（サンデン工場見学・希望者のみ)、
1/17, 24, 31 14:00 - 16:00（富士見商工会研修、一部希望者のみ)、
3/16（月）10：00 - 11:00

▸内容　海外研修に向けて事前準備を行い、帰国後は研修の振り返りを行った。

【本研修（太字がタイ王国)】

▸実施日　**9/3（水）～9/11（木)**、2/15（日）～2/15（土）

▸実施場所　**Language Institute Thammasat University, Sanden (Thailand) Co., Ltd.**
醒吾科技大学、台湾三電股份有限公司

▸内容　大学生とのボランティアや調理実習を含む異文化理解研修
うち 1 日ずつ、伊勢崎に本社を構えるサンデン株式会社の現地法人見学

▸参加者　本学学生　**23 人**、13 人

≪参加学生自己評価≫　※5 点満点

主体性	**3.61**	4.42
働きかけ力	**3.17**	3.00
実行力	**3.74**	4.42
課題発見力	**3.74**	4.00
計画力	**3.13**	4.00
創造力	**3.70**	3.75
発信力	**3.35**	4.08
傾聴力	**4.30**	4.33
柔軟性	**4.13**	4.25
状況把握力	**3.78**	3.83
規律性	**4.13**	4.17
ストレスコントロール力	**3.96**	3.83
語学力	**3.48**	3.42
TTL	**3.71**	3.96

(左上)タマサート大学で学生と交流

(右上)タイの王宮料理とトムヤムクン作りに挑戦

(右下)醒吾科技大学学生と、現地老人ホームにてボランティア

(中央下)春節の行事に参加

(左下)サンデン台湾を見学

≪成果、所感≫

ほぼ全員から「視野が広がった」「語学学習への意欲が高まった」「今後は積極的に行動したい」との声を聞くことができた。今後の学生生活への良い刺激となったことが窺える。

©2015 KYOAI GAKUEN UNIVERSITY